
ぼっちメシのすすめ。

縄白こお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼっちメシのすすめ。

【Nコード】

N9780Y

【作者名】

縄白こお

【あらすじ】

ある大学の学食でのごきうと。

それはどこにでも風景で

ありふれたやりとり。

笑う者

笑われる者

あなたは、どちら側ですか？

彼女は言った。私を一人ぼっちだと。
私は思った。彼女は独りぼっちだと。

昼食のピークを過ぎた学食は、閑散としていた。

学生の数では他の追隨を許さないマンモス校において、学食の席取りは必修科目である。

とはいえ、いくつかのグループが遅いランチを楽しんでいる以外はほぼがら空きの状態とあらば席取りに苦勞することもない。

五人の女子学生が、食事をするでもなくただおしゃべりを楽しんでいる。私はその後ろの長テーブルにトレイを置いた。

「ねえ、あの子ぼっちじゃん」

席に着き。コートを脱ごうとした私の耳に届いた声。ひそめた声に混ざって聞こえるくすくすという笑い声。

構わずコートを脱ぎ、椅子に掛ける。トレイに載った日替わりサラダと蕎麦を箸でつつきながら、しかし一度もうつむかなかった。

こんな距離では、聞こうとせずとも　ひとりのときはなおさら

周りの会話は聞こえるもので。

後ろの女子学生の楽しげな声は絶え間なく私の鼓膜を揺らす。

こんなに大声で話す必要があるのかと思うほどの、大きな声。

群というものが行動を大胆にするのは言うまでもない。しかしその力が増大するわけでもないということは言っても分からないだろう。とにかく、人は太古の昔から、集団になれば強いと思い込んでいるのだ。

それは一揆然り、連判状然り、スイミー然り。もはやDNAレベル

で組み込まれていることなので、いまさら修正などおいそれとできたものではないのだ。

「ねえシュークリーム食べたくない？買って来てよー」

甘えるような、妙に鼻にかかった声がする。

「えーチョコの方がおいしいって」

「ちゃん、おねがいー」

「いや、今日400円しかないんだ」

「一個70円だからいけるでしょ」

群は、女子特有のきやははという笑い声を上げた。

四人分のきやはは。きやはははははははは。

蕎麦の上に乗ったねぎを咀嚼する音が消えた。

「じゃあ、あたしも食べたいから買いに行つて来るね」と席を立つ彼女のうしろ姿がドアの向こうに消えるころ、群れは奇妙な色に変わる。

「あの子、便利だけどうざいよね」

いやな声に同調するいやな長音を聞きながら、ブロッコリーを齧る。かけすぎたドレッシングが口の中でじわつと溢れた。

こんな風に。

こんな風に、誰かを貶めることでしか表現できないものってなんだろう。蕎麦の器に残った汁を飲み干しながら思う。

一見、和気藹々としているように見える群れの中にも、確かに階級があつて。

みんないつも、どこかで、誰かを馬鹿にして生きている。

誰かを貶めることで得られるつかの間の優越感をエネルギーに、生きていく。それが身内であれば、なんとまあ低燃費なこと。

「わーありがとー」

わざとらしく盛り上がりながら買ってこさせたお菓子をほおばる群は、自己顕示欲と、密かな愉悦に満ちていた。

私が食後のお茶を注ぎに席を立つと、ちいさく笑いが起こった。ぼっちだって食後にはお茶くらい飲みたいものだ。できることならば、静かに。

わたしたち、こんなに楽しいのよ。独りで居るなんて恥ずかしい

熱々のお茶を啜りながら、背中に感じる視線は確かな嘲笑だった。けれどどうしてだろう。私は、彼女たちの方が恥ずかしく、目も当てられないのだ。可哀相、と言ってもいい。

そういうことだ。

私は笑っていた。

もちろん、顔や声には出さないが、心の中は大爆笑。腹を抱えて転げまわっているのだ。

私を笑う誰かも、違う場面では誰かに笑われている。それは他ならぬ私かもしれないし、あるいは……

「ほら、行つたよ」

再びトピックが私に移ったのを感じながら、食べ終えた食器を持って席を立った。

私が去れば、そのトピックは終わる。「ひとりで食べるとかありえないよね。可哀相」なんてちよつと笑われたあと、忘れられる。

その場限りのお笑い種。お手軽だ。

ただし、いつまでも笑えるようなことではないので忘れる。

禿げた人が来れば笑い、太った人が来ても笑い、またひとりで来るものが居れば笑うのだろう。

つまりはそういうことだ。

私は値段の割に旨い蕎麦の余韻に浸りながら、出口へ向かう。

どこかで笑い声が聞こえた気がした。

あの子、ひとりだけ浮いてない？

「パシられてんじゃん。かわいいそ（笑）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9780y/>

ぼっちメシのすすめ。

2011年11月29日16時46分発行